

高齢者の生きがい探究

北村 浩一郎

The Aged's Search after a Life Worth Living

Kouichiro KITAMURA

はじめに

わが国の高齢化は、世界に類をみない早さで進んでいる。また、科学技術の高度な発展によって、情報化、国際化、都市化、核家族化等々が進み、わが国の家庭や地域社会はもとより、社会全体が急激に変化している。そのような中で、高齢者は、どのようにして「生きがい」を探究できるのだろうか。また、周囲の人々は、その探究をどのようにして「援助」できるかを問い、これからの高齢者の生き方・在り方の方向づけを試みたいと思う。

I. 各種世論調査の結果にみられる「老後の生きがい」

まずはじめに、人々が、通常、どのようなことを「生きがい」と考えているかを明らかにするために、いろいろな世論調査の結果を調べてみよう。

各種の世論調査で「老後の生きがい」として、常に上位にランクづけされているのは、「趣味・娯楽」である。

たとえば、全国的規模の調査事例をとりあげてみると、以下の調査1～3のようになっている⁽¹⁾。

これらの調査の上位3位までをあげてみると、調査1では、1位は「趣味・スポーツ」(43.5%)、2位は、「家族」(28.5%)、3位は、「友人との交際」(15.5%)となっている。また、調査2では、1位は「趣味を楽しむこと」(58.4%)、2位は、「夫婦で仲よく暮らすこと」(44.8%)、3位は、「孫の成長を楽しみにすること」(22.5%)となっている。さらに、調査3では、1位は、「働ける間は仕事を続ける」(58.0%)、2位は、「自分の趣味を楽しむ」

調査1 国民生活選好度調査（平成2年度）
 経済企画庁国民生活局 2.6 全国15歳～74歳の者
 4,000人 3,176人（79.4%） 個別記入法有（62.6）

問「老後」の生き甲斐はなんですか。

仕事	8.6%
趣味・スポーツ	43.5
家族	28.5
友人との交際	15.5
その他・無回答	3.9

調査2 読売全国世論調査（2年8月）
 読売新聞社 2.8 全国有権者 3,000人
 2,161人（72.0%）個別面接聴取法 有（高齢化社会：62.8）

問 あなたは、老後、とくに何を生きがいにしたいと思いますか。次の中から、二つまであげてください。

[リスト] (2 M. A.)

趣味を楽しむこと	58.4%
孫の成長を楽しみにすること	22.5%
老人仲間と愉快地に過ごすこと	16.4
社会奉仕活動をする事	7.6
仕事をもち続けること	16.1
財産を蓄えること	1.9
夫婦で仲よく暮らすこと	44.8
信仰をもつこと	3.5
とくにない	3.5
その他・答えない	1.9
計 (M. T.)	176.6

調査3 時事世論調査（2年5月）
 時事通信社 2.5 全国20歳以上の者 2,000人
 1,456人（72.8%）個別面接聴取法 有（35年から毎月）

問 あなたは老後の生きがいをどのようにお考えですか。この中「回答票」からいくつでも選んでください。

(M. A.)

働ける間は仕事を続ける	58.0%
仕事から離れて気楽に暮らす	10.9
社会的活動に参加する	15.7
自分の趣味を楽しむ	55.6
友人・知人とできるだけつき合う	36.8
人間関係のわずらわしさを忘れ気楽に生きる	9.3
その他	0.3
どれとはいえない、わからない	3.0
計 (M. T.)	189.6

高齢者の生きがい探究

(55.6%)、3位は、「友人・知人とできるだけつき合う」(36.8%)となっていて、いずれの調査でも「趣味」が「老後の生きがい」と考えられていることは、明らかである。

このような傾向は、各地域ごとの調査にも示されている。上記調査所収の『世論調査年鑑』の平成5年版によって調査事例をあげてみると下記の調査4～6のようになる。

調査4以下の上位3位までをあげてみると、調査4では、1位は、「趣味、娯楽」(56.1%)、2位は、「家族とのふれあい、だんらん」(46.8%)、3位は、「友人、隣人とのつき合い」(34.4%)となっている。また、調査5でも、1位は、「趣味を深めたり、新しい知識を身につけること」(59.4%)、2位は、「毎日の生活の中で、家族や友人などとの接触を深めながら暮らすこと」(57.1%)、3位は、「自分に適した仕事をもつこと」(32.0%)となっている。さらに、調査6でも、1位は、「趣味やスポーツ」(72.6%)、2位は、「友人とのつきあい」(30.6%)、3位は、「子供や孫、家族とのだんらん」(20.0%)となっていて、これらの三つの調査は、極めて類似した結果を示している。つまり、「老後の生きがい」といえば、まず「趣味」であり、次いで「家族・友人との触れ合い」ということになる。

調査4 山形県県民意識調査

山形県企画調整部 4.9 山形県 20歳以上の者 1,200人
951人(79.3%) 個別面接聴取法
(注：地域別の抽出率が異なるため、加重集計したので、集計上はN=1,772)

問 [回答票] あなたにとって老後の生きがいは何ですか。この中から2つまであげてください。(若い人に対しては、将来、老後の生きがいとなるだろうと思うものを聞く。)(2 M. A.)

仕事	16.6%
趣味、娯楽	56.1
サークル活動	3.3
ボランティア活動、奉仕活動	5.5
学習	2.9
友人、隣人とのつき合い	34.4
家族とのふれあい、だんらん	46.8
スポーツ、レジャー、旅行	20.4
その他	1.5
わからない	2.4
計 (M. T.)	189.8

調査5 宮城県民意識調査

宮城県総務部 4.8 宮城県 20歳以上の者 2,000人 1,633人 (81.7%)

個別面接聴取法 有 (元・8)

(注：地域別の抽出率が異なるため、加重集計したので、集計上は
N = 2,857)

問 [回答票] ところで、あなたにとって老後の生きがいは何だと思
いますか。この中からあてはまるものをお答え下さい。(M. A.)

自分に適した仕事をもつこと	32.0 %
趣味を深めたり、新しい知識を身につけること	59.4
老人クラブ、サークル活動に参加すること	15.2
ボランティア活動など奉仕活動に参加すること	12.4
毎日の生活の中で、家族や友人などとの接触を 深めながら暮らすこと	57.1
その他	0.8
わからない	3.3
計 (M. T.)	180.2

調査6 大和市民意識調査

神奈川県大和市 4.11 大和市 20歳以上の者 3,000人 1,955人
(65.2 %) 郵送法 有 (2.1)

問 あなたは、老後において、何か生きがいとなるものを持っていますか。

(ア) 持っている	55.6 %
(イ) 持っていない	18.0
わからない	22.4
無回答	4.1

SQ. ((ア)の方に)それはどのようなものですか。主なものを2つま
でお選びください。(2 M. A.) (N = 1,087)

老人クラブなどの グループ活動への参加	7.0 %
子供や孫、家族とのだんらん	20.0
教養を高めること	16.7
仕事をすること	17.1
趣味やスポーツ	72.6
友人とのつきあい	30.6
宗教・信仰	6.4
社会福祉活動	5.5
その他	1.6
計 (M. T.)	177.5

以上のことから、多くの場合、「老後の生きがい」は、趣味を楽しみながら、孤独にならないように、家族や友人と接触していくことだと考えられているように思われる。

Ⅱ. 「趣味・娯楽」は真の「生きがい」となり得るか

ところで、上述したように多くの人々が、老後の「生きがい」としてあげている「趣味・娯楽」は、真の生きがいとなり得るのだろうか。

たとえば、メンタル・ヘルス国際情報センター所長の小林司氏は、「余生を植木いじりや俳句などの趣味で送ることが高齢者の生きがいにつながるという、昔ながらの考え方に私は賛成できない。『趣味』と『生きがい』とは別のものであるし、高齢者の能力をもっと広い意味での自己実現に向かわせるべきではないかと思う。趣味はあくまでも『遊びがい』があるものにすぎない⁽²⁾」としている。

また、大原健士郎前浜松医大教授は「遊びやレクリエーションからは『生きがい』は生まれてこない⁽³⁾」と断言している。

たしかに、「趣味や娯楽のある生活」だけでは、それが、ただちに、本当の「生きがいのある生活」とは言えないのではないか。やはり、単なる趣味・娯楽は、パスカルのいう「気晴らし」(divertissement)つまり、人間のもつ悲惨さや空しさから目をそらして一時的に気を紛らわしているのではないだろうか。

もっとも、よく言われているように、「生きがい」という言葉は、漠然としていて、一義的には説明しにくい言葉であるが、たとえば、『日本国語大辞典』では、「生きがい」とは、(1) 生きているだけのねうち、生きている意義、(2) 生きていくはりあい、生きているという実感、生きるめあて等と説明してあり、その他の国語辞典類にもほぼ同様なことが述べられている。

また、専門分野別の事典類、例えば、日本生涯教育学会編の『生涯学習事典』では、「『生きがい』とは、人間が自己の生活に『はりあい』や『充実感』や『幸福感』をもたらすのを見出したときに感じる感覚・感情であるとともに、こうした対象を見出すことによって『生きることの意味』を求めようとする意識のありようである。」(原田彰)と定義している。一方、小林司編の『カウンセリング事典』では、「生きがい」を「生きる目的、生きる価値、生きる根拠、生きていてよかったという感じ、を統合したもの」(小林司)と説明している。

これらの説明・定義に共通していることは、(1) 具体的な内容は何一つ示されず形式的な説明にとどまっていること、(2) 生きがいには、生きていてよかったとか、充実しているというようないわゆる「感じられる」側面(感情・感覚にかかわる側面)と生きる目的とか意義のよう

な「理解される」側面(知的な理解にかかわる側面)とがあることを示している点である。

これらは、人々の「生きがい」の具体的な内容が、それぞれ異なっていて、すべての人が認めるような生きがいの具体的な事例がなかなか無いこと、そして「生きがい」が、感情・感覚に訴える情緒的側面と知的な理解を必要とする側面をもっているために形式的な説明にとどまらざるを得ないことを意味していると思われる。

かつて、神谷美恵子氏は、名著の誉れの高い『生きがいについて』のなかで「ひとの心の世界はそれぞれちがうのであるから、たったひとりのひとにさえ、生きがいを与えるということは、なかなかできるものではない。あるひとにとって何が生きがいになりうるかという問いに対しては、できあいの答はひとつもない⁽⁴⁾」と述べている。

さらにまた、「人間の生きがいというような奥深い問題を探求する上で意味のあるものは…機械的調査(筆者、注記、統計やアンケートや心理テスト)のあらひ網の目からは漏れてしまうもののなかにふくまれている⁽⁵⁾」としている。確かに「生きがい」のように、ひとくちでは説明できない複雑なニュアンスをもつ問題は、各種の調査やテストの類では十分把握できないのであり、われわれが最初にとり上げたいろいろな意識調査もほんの漠然とした一つの指標を示しているにすぎない。

このことは、われわれが、先に述べた第(2)の点、つまり、生きがいには「感じられる」側面と「理解される」側面があるという点からも、言われ得ることである。すなわち、「生きがい」にはこのような二つの側面があるから、機械的な調査ではなかなか把握され得ないのである。

いずれにしても、「生きがい」という以上は、それに真に打ち込んで、何かを成し遂げたという喜び、つまり自分のもつ能力や才能、個性等を毎日の生活の中で生かすいわゆる「自己実現」の喜びがなければならない。

高齢者に何が出来るか、どのような「自己実現」が可能かという疑問が起こり得るであろう。確かに、高齢になると、身体の諸機能は低下するし、物忘れもひどくなる。また、記銘力、分析力、理解力さえも低下する。しかし、総合的な判断力やものごとの本質をとらえる力は、増大し、「知恵」が深まるとされている。その点では、高齢者の「精神のはたらきは必ずしも低下するとは限らない。知的機能は加齢によって衰弱するのではなく構造の変化をみるといった方が妥当⁽⁶⁾」とされるのである。

医学的な観点からすれば、「年齢が進むにつれて脳全体の重量は軽くなるにもかかわらず、大脳新皮質のある前頭葉・側頭葉は衰えにくく、むしろ一生涯発達し続けるのではないかと考えられている。

人間の創造的活動や人格的なはたらきと密接な関係をもつ脳のこの部分が、年をとっても衰えず、むしろ発達するとすれば、老年期に生きがいある生活を送るうえで、きわめて有利な条件を備えている⁽⁷⁾」とも考えられるのである。

よく言われるように、人間は、誰でも、死の瞬間まで成長し得るとすれば、身体に障害のある高齢者も痴呆性老人も含めて、高齢者の「生きがい探究」つまり「自己実現」は、十分可能だと考えられる。ただ、多くの場合、高齢者の「自己実現」のためには、公私にわたるいろいろな立場からの「援助」が必要であらう。

Ⅲ. 高齢者の生きがい探究への「援助」

いうまでもなく、基本的には、高齢者の生きがい探究は高齢者自身の弛まぬ努力によって成し遂げられるが、高齢者の場合は、その心身の状況に応じて、いろいろな、公私にわたる「援助」が必要と思われる。

まず、高齢者の「生きがい探究」に対する公的な援助としては、周知のように、昭和38年に制定され、数度の改正を経た「老人福祉法」に基づく厚生省系の高齢者福祉の総合的、体系的な推進がある。同法、第二条では、「老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として、かつ、豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする」と高齢者福祉の総括的理念が謳われ、それを受けて、国及び地方公共団体の老人福祉増進の責務と具現に関することが規定されている。そして、厚生省系の社会福祉を中心としたいろいろな「援助」がある。なかでも、「高齢者の生きがいと健康づくり推進事業」は、中央に「長寿社会開発センター(平成2年に指定法人にされた)」, 全都道府県に「明るい長寿社会づくり推進機構(都道府県によって名称は違う)」を設置して、高齢者の社会活動、スポーツ活動、健康づくり活動など生きがいと健康に結びつく人生80年代の重要な課題ととりくんでいる。その他、社会奉仕や創造的活動によって、生きがいを高めようとする「老人クラブ」活動に対する支援などもある。

ここで、社会福祉について、これ以上立入る余裕はないが、糸賀一雄氏が述べているように、「社会福祉といっても、社会という集団が全体として『福祉的』でありさえすればよいというのではない。つまり社会が豊かであり、富んでいさえすれば、そのなかに生きている個人のひとりひとは貧しくて苦しんでいるものがいてもかまわないというのではない。社会福祉というのは、社会の福祉の単なる総量をいうのではなくて、そのなかでの個人の福祉が保障される姿を指す⁽⁸⁾」のである。高齢者の生きがい探究の「援助」としての福祉も、個々の高齢者に合

った、各々の高齢者の自己実現・生きがいを目ざした福祉的な「援助」がなされるべきである。

高齢者の「生きがい探究」に対するもう一つの公的な援助として、文部省系の「生涯教育」がある。

わが国で初めて、公的に生涯教育の観点から、教育全般の再検討の必要性を指摘した、昭和46年の社会教育審議会の答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」の中では、「これまでの医療保障や老人福祉、老人就労の施策に加えて、高齢者自身による社会的適応の学習、精神的、情緒的な安定など、その生きかたについての教育的な施策を強力に進めることがたいせつである」としている。そして、「今後の高齢者教育は、高齢者自身が老年期にふさわしい社会的な能力を養い、できるだけ長く自立的な生活を続け、世代の隔絶の幅をせばめ、生きがいのある生涯を全うすることを主眼として行なわれるべきである」とした上で、次のような八つの教育内容をあげている。

- 1) 再就職に備えての職業的な訓練に関する事
- 2) 健康管理や保健衛生に関する事
- 3) 余暇を有意義に過ごすための趣味や教養に関する事
- 4) 社会の変化を理解するための時事問題に関する事
- 5) 若い世代の理解に関する事
- 6) 話し相手やレクリエーションのための仲間づくりに関する事
- 7) 孫の教育や地域社会の子ども会などの指導に関する事
- 8) その他各種の社会奉仕の活動に関する事

これらの内容を高齢者に教育すれば、すぐに生きがいを得られるかどうかは問題であるが、とにかく、これらの内容を、高齢者が継続して学習し、生きがいを見い出すためには、家庭や社会のあたたかい思いやりとゆきとどいた援助が必要だとされている。

また、昭和56年の中央教育審議会の答申「生涯教育について」の中で、「我が国の高齢者対策は、これまで主として福祉、医療などの面が中心であった。しかし、今後は、家庭や社会が、単に高齢者の庇護に努めるだけでなく、敬愛の念をもって接するとともに、その経験や能力を社会的に正しく評価し、その積極的な社会参加を期待し、これを支援することが必要である」として、高齢者の経験や能力の社会的評価や社会参加の促進とそのための援助の必要性が述べられている。

そして、多くの高齢者は、自分の経験や知識・能力を社会で生かすこと、すなわち社会参加によって大きな生きがいを得ることができるが、そのためには、国や地方公共団体が学習機会

の充実と学習内容・方法の工夫改善をはかることが大切だとされている。

その際の具体的な公的「援助」としては、公民館を中心に行われている高齢者教室や高齢者大学などの事業を活発にすること、身近な学校施設やその他の公共的施設でも高齢者の学習機会をさらに設けること、また、図書館、博物館などの教育施設がその役割を積極的に果たすこと、さらに、電話などによる学習相談事業の充実を図るとともに、放送大学や通信教育による学習機会の提供が、種々の制約をもつ高齢者にとって、重要だとされている。

もちろん、これらの公的「援助」があるからといって、高齢者の生きがい探究がすぐに成就されるものではない。

答申で述べられているように、激動する今日の世界の中で、高齢者が、真に生きがいのある充実した生活を送るためには、自ら進んで学習をし、社会的活動を続け、主体的に生きることが大切である。

ところで、一般に、生きがいを得るためには、「自己実現」と「社会参加」が必要であるとされるが、塚本哲人氏のように、その際の「自己実現とは、一般に、仕事や趣味といわれる世界において手中にし得る⁽⁹⁾」とは必ずしも考えられない。後でも述べるように、仕事は「働きがい」が、趣味は「遊びがい」が得られるもので真の生きがいは異なるのである。また、社会参加についても、同氏が言うように、「一家団らん、地域における同世代間あるいは異世代間の交流などへの高齢者の参加は生きがいの感受に結びつきやすい⁽¹⁰⁾」とは必ずしも言えないし、最近の核家族化や個人生活中心志向は、そのような社会参加をますます困難にしている。そもそも、真の主体的社会参加は、自己実現の結果として初めて可能になるのではないだろうか。

もっとも、多くの場合、高齢者は、身体が不自由であったり、痴呆状態になっていたり、その両者であったりする。また、一見、健康そうに見える高齢者も、その環境や自他への適応力は低下しているのが一般的である。

したがって、そのような状況にある高齢者の生きがい探究への「援助」は、上述したような公的な援助だけでは不十分で、私的なそして精神的、個別的な「援助」が重要になってくる。特に、わが国の多くの高齢者達のように、経済的、物質的には比較的恵まれた境遇にある人々に対しては後者のような援助がより重要になってくるのである。

ただ、その場合も、よく言われるように高齢者を、もっぱらあたたかくいたわり、手厚く介護するだけでは、高齢者の生きがい探究は、成就され得ない。また、逆に、高齢者を無視したり、邪険な扱いをしたりしても、高齢者の生きがいは、達成され得ない。つまり、「老人が主体的に行動したり発言したりすることをうとんじ、老人を邪魔者扱いしたり、逆に老人をいた

わるあまり過保護となり、結果的には老人の主体性を損う⁽¹¹⁾」し、そのことによって、「老人は、自己実現の『場』を失い、生きがいを生みだせなくなってしまう⁽¹²⁾」のである。

奈倉道隆氏は、「老人の生きがいは、老人自身の主体的努力によってのみ生み出されるのではなく、周囲の人々とのかかわり方が重要な意義をもつ。しかもそのかかわり方は、温いものであればよいというのでもない。老人の適応を助けるような支援であれば生きがいを助長するが、老人の自己実現を妨げるような過保護になっては生きがいを損う⁽¹³⁾」としている。

そして、その上で、同氏は、高齢者とその周囲の人々とのかかわり方を次のような三つのパターンに類型化し、それぞれの得失を検討している⁽¹⁴⁾。

それらのパターンは、

- 1) 「老人の個人生活を尊重して、なるべく立入らないようにする」。
- 2) 「生活の相依性を重視して、老人をいたわり、手厚く養護する」。
- 3) 「個人の独自性を尊重しつつ共に生きる」の三つである。

これらの三つのうち、1)については、高齢者の自己実現のためにはプラスになるが、適応支援の面ではマイナスになる。また、2)については、逆に、高齢者の自己実現の面ではマイナスになるが、適応支援としてはプラスのはたらきをする。そして、3)については、高齢者の自己実現と適応支援の両面において、プラスのはたらきをもつとしている。

要するに、奈倉氏によると、高齢者の生きがい探究は、高齢者自身の主体的努力だけでは成就せず、周囲の人々との関係の仕方が重要で、周囲の人々から疎外されたり、逆に過保護にされたりすることなく、高齢者自身の独自性を保持しつつ、周囲の人々と共生しながら、自己実現と環境への適応を達成してゆくことが肝要ということになる。

その際、奈倉氏自身は言及していないが、高齢者自身が、加齢とともに起る、身体的、精神的変化を、たとえどんなに厳しい場合でも、自己受容していることが根本的な前提となるであろう。そして、その場合の「自己受容」に際しても、私的で精神的、個別的な「援助」を必要とするケースもありうるのである。それは、最早、カウンセリングの領域に関わってくるのであろう。

今まで、高齢者の生きがい探究に対する公私の「援助」について言及してきたが、もとより、厳密に言えば、それらは、明確に区分できるものではない。便宜上、一応のめやすとして区分したにすぎない。

しかし、いずれにしても、高齢者の生きがい探究にあたっては、上述したように、多様な「援助」が必要であることは明らかであろう。

Ⅳ. 高齢者の「生きがい」としての「自己実現」

通常、私たちは日常の生活や仕事に追われていて、日常性のなかに埋もれていることが多いが、時として、ふとわれに帰り、自分の生きがいは何かとか自分の存在意義は何かとあれこれ問う場合がある。そして、神谷美恵子氏によると、その際、私たちが認識上の問題として発する問いは、一般に、次のような四つの事柄である⁽¹⁵⁾。

- 1) 自分の生存は何かのため、またはだれかのため必要であるか。
- 2) 自分固有の生きて行く目標は何か。あるとすれば、それに忠実に生きているか。
- 3) 以上あるいはその他から判断して自分は生きている資格があるか。
- 4) 一般に人生というものには生きるのに値するものであるか。

そして、多くの場合、人々は、上の1)に肯定的に答えることができれば、実際の生活のなかでは、十分生きがいをもつことができると思われる。「老年期の悲哀の大きな部分はこれに充分確信をもって答えられなくなることにあろう。したがって、もし老人に生きがい感を与えようと思うならば、なんなり老人にできる役割を分担してもらおうほうがよいし、また何より愛の関係において老人の存在がこちらにとって必要なのだ、と感じてもらうことが肝要⁽¹⁶⁾」なのである。

ところで、高齢者が、何らかの役割分担をしたり、「愛の関係」のなかで、それなりの「存在理由」を感じとりうるためには、高齢者のみが持っている豊かな体験、生活の知恵や人間的な魅力、さらにそれぞれが長年かけて身につけた技能などを実際の生活のなかで発揮し、他人にもうけ入れられることが必要である。

そして、このように、高齢者の持つ豊かな体験や知恵、個性や技能などを現実の生活の中に生かし、実現してゆくことが、高齢者の「自己実現」であるとともに「社会参加」にもなる。そして、そのことが、高齢者の真の喜びであり、「生きがい」なのである。

大原健士郎氏は、ずばり「生きがいは自己実現の歓(よろび)」と定義しておられる⁽¹⁷⁾。また、小林司氏は、「真の『生きがい』とは、むやみに働く時の『働きがい』や、暇つぶしの楽しみや趣味の際の『遊びがい』ではなくて、人間らしく『生きるかい』である⁽¹⁸⁾」とする一方で、「高齢者だけが持っている生活の知恵、自分の体が伝えている伝統、頭の中に記憶している歴史的体験、体にしみこんでいてにじみ出てくる生きざまの美しさ、高齢だからこそ恐れずに発言できる自由な思想、をこそ活かすべきだ⁽¹⁹⁾」と述べている。

しかし、このような高齢者の生きがい探究は、多くの場合、高齢者が心身に障害をもっているということもあって、極めて困難である。神谷美恵子氏も述べているように、本来、「本質

的な自己を実現して行くには多くの努力と根気が必要⁽²⁰⁾」なのである。しかも、上にも述べた事だが、厚生省系であれ、文部省系であれ、いわゆる「公的な援助」だけでは、なかなか「自己実現」は達成され得ない。

そこで、われわれは、ここに、最近、教育老年学でも注目されている「方法としての対話」を提起したいと思う。

これは、ソクラテスの問答法または産婆術に由来するものであるが、要するに、「対話」することによって、その高齢者の豊富な体験や知恵を想起させ、そのアイデンティティ(identity)や主体性をよみがえらせ、その結果として、高齢者自身が、自己実現—その高齢者の心身の状態に応じていろいろなレベルの自己実現を可能にし、「生きがい」を感知することを目ざす方法である。

実際「生きがい」といった個々人の内面にかかわる奥深い問題は、高齢者に対する公的な「援助」だけで事足りるのではなく、個別的な「対話」・「想起」と高齢者自身による「学習」が重要である。

しかも、その場合の「学習」は、Learning to Haveつまり財産や社会的地位、権力などを所有するための学習ではなく、いわゆる Learning to Beすなわち人間らしく生きるための学習でなければならない⁽²¹⁾。

そうすることによってはじめて、高齢者が潜在的にもっている知恵・能力・個性などが現実化し、他者にも受けいれられ、「自己実現」の喜びつまり「生きがい」が得られるのである。

注 記

- 1) いずれも、内閣総理大臣官房広報室編『世論調査年鑑』—平成3年版—所収。ただし、調査主題の下の文言は、調査機関、調査年(平成)月、対象者(母集団)、標本数、回答者数(有効回収率)、調査方法、同一主題による前回調査の有無の順になっている。以下も同じである。
- 2) 小林司著『「生きがい」とは何か』、日本放送出版協会 1995年 p. 195.
- 3) 「朝日新聞」(1995年9月17日)所収。
- 4) 神谷美恵子著『生きがいについて』(著作集I)みすず書房、1994年 p. 11.
- 5) 同上書 p. 10.
- 6) 奈倉道隆「医学の面からみた生きがい」、『比較思想研究』第4号 比較思想学会 1977年 p. 7.
- 7) 同上誌 p. 8
- 8) 糸賀一雄著『福祉の思想』日本放送出版協会 1993年 p. 67.
- 9) 塚本哲人編『高齢者教育の構想と展開』全日本社会教育連合会 1990年 p. 20.
- 10) 同上
- 11) 奈倉道隆「医学の面からみた生きがい」、『比較思想研究』第4号 比較思想学会 1977年 p. 8.

高齢者の生きがい探究

- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 同上誌 p. 9.
- 15) 神谷美恵子著『生きがいについて』(著作集 I)みすず書房, 1994年 pp. 33-34.
- 16) 同上書 p. 34.
- 17) 「朝日新聞」(1995年名9月17日)所収.
- 18) 小林司『『現代の生きがい』とは何か』『現代のエスプリ』281 至文堂 1990年 p. 26.
- 19) 小林司著『「生きがい」とは何か』日本放送出版協会 1995年 p. 194.
- 20) 神谷美恵子著『生きがいについて』(著作集 I)みすず書房, 1994年 p. 70.
- 21) E.フロム著, 佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店 1992年 参照.